

## 十訓抄と北條重時の家訓

——作者湯淺宗業の環境——

永井 義憲

### 一、『十訓抄』と湯淺宗業

中世の説話集のひとつ『十訓抄』はその名の示すがごとく、教訓を目的として十篇に分ち各篇の最初に教訓のことばをのべ、それにふさわしい多くの例話(五三〇)を引用しており、その引用説話には本書独自のものは比較的少なく、多くは手を入れることのないそのままを採録して教訓の語を挿入したものであるが、近世以降、昭和二〇年以前においては多くの読者をもち、教科書などにも採用せられることが多かった。しかしその妥協的な教訓的な態度の故に現在ではほとんど注目せられないようである。然し中世説話集として文学史の上からは主要な作品といわねばならないであろう。成立について建長四年(一一三二)と明記した序を持っているのかかわらず、その撰者名が明記されていない。この撰者については古くから、さまざまな推測が行われてきた。その主要なもの(1)は橘成季・菅原為長・六波羅二蔵左衛門入道であるが、(2)先学はすでに前二者を否定して、第三の説を信憑すべきものとして(3)みて来たが、なおその個人名は不明であった。私はこの不明とされて来た撰者を、六波羅探題に仕えた紀伊の豪族、湯淺宗業と推測し、その環境関係からこの書の撰者としてふさわしい事を「十訓抄の作者」(四四と四四文学)において略述し、さらにその補説を「十訓抄―その

成立と作者―」(四四文学、昭和三三年一月)として発表した。この私説について

「さて湯淺宗業説は以前の説を明確に前進させたもので、殆ど定説に近い地位をうるに至っている。著者の推測にこの様に明確な説の提出されたことは甚だ少ない例である」(『国史大系書目解題』上巻・山田英雄)

という讃意を示された説もあるが、なお決定的な論據を欠く点から疑問をもつものもある。なかには先学によつて『十訓抄』の序によればその成立は菅原為長の没後七年である点から明瞭に否定された菅原為長説を強調する説があり、その論調の絢爛たる博引傍証に眼をうばわれて軽卒に盲従する説もある。これら否定説の共通する立論は地方武士にすぎない湯淺氏のなかからかくのごとき、文学的教養あり、文筆に長じたものが出現する筈がないという、中世文化に対する誤った先入観に基づくものであつて、湯淺氏を追求し、撰者としてあげられた宗業個人を探索して否定的資料を発掘して論を展開せしめたのではないという特色を持っていることは甚だ残念である。換言すれば印象的批評というべきであらうか。私はこの推説を提起して以後、つとめて湯淺氏の周辺をたどり、今なおその撰者であることを証明することの出来る確定的な文献的資料は発見し得ないのではあるが、湯淺宗業個人をめぐる環境にはこの『十訓抄』を執筆し得る可能性が存在した事は確信出来るようになった。いまここにそれらを述べて、否定説の

根拠のない事を証して見たいと思う。論をすすめる必要から、既述の拙論に若干の補訂を附け加えながら『十訓抄』の語る作者像と、湯浅宗業像の一致を再説する。まずその前に作者についての伝承資料の価値を考えて見たいと思う。

この作品の作者をたどる時、もっとも有力な手掛りは妙覚寺本の奥書である。妙覚寺本はいま散佚してその存否が不明であり、かつその妙覚寺の所在についても他に証すべき記述が見当たらないが、狩谷極斎校本（関根正直、博士蔵）、塙本（佐藤誠実、博士蔵）、埴本（埴平、博士蔵）などにも転写してこの奥書が存することを「十訓抄考」（埴平）は指摘している。その奥書とは

或人云、六波羅二藤左衛門入道作云々（長時時茂、等奉公）

というもので、早くは屋代弘賢、藤岡継平、野村八良、近くは永積安明の諸先学もこの奥書を信憑すべきものとしておられる。これに対して「妙覚寺本が古写本であるというだけで、その奥書がいったい何時書き加えられたかということも明確でない上、或人云と記されているように何時の頃の人ともわからない不特定の一人物の説に寄り掛かっている点で作者を知る一つの手がかりにはなっても、これを唯一の根拠とみることにしてはなお疑問が残されているわけである」と言い、『清巖茶話』の「拾訓抄は為長卿の作かと覚る也。云々」をあげて為長説を主張しようとする説（前掲）がある。しかしこれは正徹が自己の読後感の漠然たる印象で、おぼゆるなりと推測したのであって、彼は為長の名をあげながらその没年を知らず、ただ同時代の有名人であったという記憶によったのみである。これに対してその注者の個人名は不明ながら、長時、時茂等に奉公したと伝聞ではあるが具体的に指摘し、時間的にも成立年代に近い年代の注記であらうと考えられる妙覚寺本奥書の方に信憑性があることは当然であらう。

また冒頭に記された序文に疑問を抱き後人の偽序とするのは全く根拠がなく、特に為長没後七年にあたる点からその七回忌に際しての後人の附加とするような説を証する語は皆無であり、一代の鴻儒として自他共に認められた菅原為長にふさわしくない無用の謙遜の語句が序

文に散見し、この提説は考慮の余地がないと断ぜざるを得ない。さてこの序および前記の奥書と本文による作者像を再説するならばおよそ次の如くであらう。

(1) その撰述の時、すなわち建長四年（一一五二）に「をのづからいとまあき、こゝろしづかなる折ふしにあたりつゝ、草のいほりを東山のふもとにしまして蓮のうてなを西の雲にのぞむ翁」（序）とあるごとく、京に居住して、かつ仕官の身でありながら閑暇を得てこの書を述作し、老境に入っていた。北條長時が六波羅探題（北）に在任した時である。

(2) 一族の長老として「いまだ此道をまなびしらざらむ少年のたぐひをして、心をつくるたよりとなさしめんがために」賢しきは徳多（徳）く、愚なるは失多きが故に昔今の物語から例話を採集してこの書を編んだ。（序）

(3) 平清盛の慈悲深きこと、平重盛の思慮ありしことなど他書に見えぬ話があり、平家の侍、難波三郎経房の雷死のことなども『平治物語』などにも出ているが、この書が正しさを伝えているようで、平家一門について親しきをもつ雰囲気がこの筆者の周辺にあった。

(4) 仏教に深く帰依していたが新興の浄土教系の思想は見られず、引用の仏典も『法花経』『維摩経』『往生要集』『四十一条起請』（源信）などと、『俱舍論』『摩訶止観』に依拠した行文もあり六波羅蜜や十地を説いている。なお第九の第五話に世に怨み不満をもち出家するも間もなくまた還俗する愚かさを説く条で、京の周辺の隠遁者のあった地名をあげず、高野・粉河と紀伊の地名のみをあげている。

(5) 詩歌など文芸に関する智識が豊富であった。また北面に仕えたころの若き日の西行が娘の死を聞いても、毅然としていたという逸話は西住（源次兵衛、附秀政）が人に語った事として記されているが、これも他書には見えぬものである。

(6) 妙覚寺本奥書の「二藤左衛門入道」とある二藤を次席という説もあったが、これは太郎に次ぐ二郎の意であって、この奥書を記入



した時点は、撰述の時期よりやや後であるが、そのころは二郎左衛門入道と言えは相当著名な人物であった。序によれば当時はなお仕官の身であつて、入道ではなかった。その後すなわち『十訓抄』撰述以後に剃髪して入道となつたことが判明する。この点から私は妙覚寺本奥書は撰述以後間もなくの註であり、なお存生のころではなかつたらうか。

以上が作品自からの語る作者像であるのに対して、私が作者として比定した湯浅宗業は次のとき姿をもつて歴史の上に現われてくる。

(1) 湯浅氏は紀伊の豪族で六波羅に仕え、鎌倉幕府の有力な西国御家人のひとつであつた。西国御家人の主要な任務は宮中諸門の警護、市街の警備・治安維持にあたることであつて宗業は京都に邸をもち、在京の時にはそこに居た。建長五年(五三)十二日の法勝寺阿弥陀堂供養には後深草天皇の臨幸があつたが、その寺門守護の武士の中に湯浅輩とある。このころは在京していたであろう。宗業は紀伊保田庄石垣庄の地頭職を相伝し、一族における惣領の位地を占めたこともあり重鎮であつた。左衛門尉に任ぜられた年月は不明だが、寛喜三年(三三)の一族連署状には兄の宗基、弟の宗氏と共にすでに左衛門尉に任ぜられている。『湯浅氏系図』には傍注して「二郎左衛門入道智眼と記されている。この建長四年には年令およそ五八才と推測される。出家入道は弘長二年(六三)であつた。

(2) 祖父宗重は平治の乱に際して平清盛が熊野詣での途上、京都の変を聞いて進退に迷つた時、一族を率いて馳せ参じ急遽上京をすすめた有力な武士であつた。しかし後に、頼朝の挙兵平家の没落に際して一度は重盛の遺児丹後侍従忠房が屋島より紀伊に逃れて湯浅氏をたよるや三ヶ月にわたる抗戦を続けたが、文覚ならびにその弟子である上覚(宗重)の説得により抗戦をやめて源氏に従ひ、後の義経・行家の謀叛にもくみせず、頼朝より特別の下知を受ける以外には守護人の催しにも従う要なきことが定められた。これらの委細は『初期封建制の構成』(安田)所収の「鎌倉時代武士団の構造——紀伊国湯浅党に就いて——」

にすでに述べられたところだが、この目まぐるしく動く政治的変動に巧みに処して誤らなかつた祖父宗重の言動は、おそらく宗業の幼時に強い影響を与えたであろうが、この宗重の壮年時に清盛・重盛父子への親昵が、その独自の逸話をこの家に伝えたことが推測出来る。建長四年は平家がすでに亡びて約七〇年、平家の興隆と共に世に出でた湯浅氏にとっては、政権の所在は変遷してもなお記憶すべき話柄であつたことが推測される。

(3) 湯浅宗業が仏教に対して篤信者であつたことは一族に上覚(叔父)があり、明恵(従兄)があつたことが強い影響を与えたのであろう。これらについて後述する。宗業は弘長二年(六三)京都において急病を得て出家せんとし、時の六波羅探題(時義)より出家を思い止るべく再三の使を受けたが命旦夕に迫つたので止むを得ず出家を許され、法名を智眼となつたが幸に命を長らえいてる。この宗業の信仰にもっとも強い影響を与えたのは二五才の年長である従兄の明恵上人であらう。明恵が渡唐の志をおこしてまさに出発しようとした時、春日大明神が宗業の母であり宗光の妻である住心尼の口をかりて託宣をくだし、遂に渡唐を中止したのは紀伊保田庄の宗業の家であつた。後に彼はこの家を明恵に寄附して星尾寺としたが、彼の最晩年にこの寺に田地を寄進している。主は主とし、従者は従者として分に応じて傲慢することなかれ、堪え忍ぶべしとする『十訓抄』を通じて一貫してあらわれている態度は明恵上人の有名な「あるべきやうは」という教訓に通ずるものがあるのではなからうか。

(4) 宗業の詩歌文芸について直接あげ得るものはいまだ見当らない。しかしその筆蹟文章は自筆のものがいくつか現存している。仮名で記されたものに「湯浅宗業星尾寺寄進状」(高山寺文書)がある。短かいものであるが、流麗達意の文章で筆蹟も力強く巧みである。筆蹟はよくその人を表現するものであるが、一見すれば宗業その人の教養をよく伺うことが出来てなみなみならぬものが有つたことを偲ぶことが出来る。この文学的方面における環境については後述する。



以上は既述の拙稿を要約、あるいは若干の附加をして『十訓抄』より見たる作者像が、歴史上の湯浅宗業像と一致し全く矛盾のないことをのべたのであるが、次に従前触れなかった、この湯浅宗業が『十訓抄』を執筆する直接の原因となり、また影響を強く受けたと考えられる一文献の存在することを指摘し、かつその執筆事情についてもその二者に共通のものがあることを考えて見たいと思う。

註

(1) 明治三五年初版の石橋尚宝著『十訓抄詳解』の附篇「十訓抄考」(藤岡龍平)は従前の説を批評しながら第三説の妥当性を述べている。諸本を広く採訪せられて善本を翻刻された永積安明氏の岩波文庫『十訓抄』の解説もこれを認めておられる。

(2) 乾克己氏説。その論及された論文は多いが「十訓抄の作者は菅原為長か」(国学院雑誌、六八巻五号)「十訓抄と菅原為長補説」(国学院雑誌、七〇巻四号)によって代表されよう。

(3) 志村有弘「十訓抄の説話配列と編者」(『中世説話文学研究序説』所収)

(4) 高山寺文書にあるというが、いま見出し得なかった。安田元久氏著『初期封建制の研究』一四〇頁による。

(5) これを僧・俗・帝王・臣という身分について解するのは『明恵上人伝記』附録の遺訓や『沙石集』からで、本来は戒律を守るのが「あるべきやう」であるという。(田中久夫『明恵』一八八頁)私見では在俗の人に對する明恵の教訓にはこの様な意味のことばもあったのではなからうかと思う。なおこれは明恵の独創ではなく天台教学の主要な考え方の一つで、叡山、三井寺、安居院などの教学で微妙な差があったと思われる。

## 二、『十訓抄』と『六波羅殿御家訓』

湯浅宗業が六波羅探題の管轄する西国御家人の有力な一族の重要な位地を占めていたことはすでに多くの先学の指摘したところ。その彼が何故に『十訓抄』を執筆しようとしたのであろうか。単に父祖が逞しく時世の変転を見透して生きて来たその過去の教訓を一族の少年

に伝えかつ教えようとしたのであろうか。そのほかに執筆を促す原因ともなるべきものがあつたのではなからうか。私はいまこの湯浅宗業の周辺を辿つてその有力なひとつを見出すことが出来たと思う。すなわち『六波羅殿御家訓』および『極楽寺殿御消息』という中世武家の家訓の存在である。ともに六波羅探題北條重時の筆で、特に前者は『十訓抄』に先立つことおよそ六年である。

六波羅探題は執権・連署につぐ幕府の要職でその主たる任務は朝廷側の動静をさぐり、洛中の治安を維持し、西国御家人の監督・統制がその任務であつた。北條重時は兄泰時その子時氏のあとを受けて六波羅探題の三代目に就任したのは寛喜二年(三〇三)三才の時であつたが以後一八年間その職にあり、三浦泰村の宝治の叛乱(四七)に際してはよく京都の動搖を鎮定し、直後幕府の連署として執権時頼をたすけるため、職を嫡子長時にゆずり東歸した。時に年五〇才。世に伝えられる北條時頼の善政のかげにこの重時の補佐があつたのである。重時は康元元年(五六)五九才で連署を辞して出家して法名を觀覺という。この年は時頼も病によつて出家したがそれに先立つて出家したのである。執権は重時の嫡子長時が帰東して執権となつた。これは時頼の長子時宗が幼少のためであつた。従前の執権職の授受に際して必ず一族内の擾乱が伴つたのに対して、この時は始めて平穩のうちに行われたがおそらくは重時父子の人格が高潔円満によるものであろう。長時の執権就任に伴い、その弟時茂すなわち重時の次子が六波羅探題となつた。重時は弘長元年(六二)の春、極楽寺の別業が成つたので、そこに移り、極楽寺殿とよばれたが、同年六月病んでここで没した。数え年で六四才である。のち重時の三子義政・四子業時ともに幕府の連署に任ぜられており、北條氏一門のうちの柱石ともよばれるべき家系である。『六波羅殿御家訓』(北條重時家訓とも)はこの重時が離任に際してその後任である一八才の長時の為に作製したと言われている(氏説)あるいはさらに数年早く長時元服の時とする説(氏説)さらに近くは寛元四年九月一日から宝治元年七月三日までとする説(石井利雄氏説)もあるが、少くとも長時に与えた



教訓書である事には誤りなく、『十訓抄』撰述に先立って京都の湯浅宗業が奉仕した六波羅において、このような教訓書が成立していたという事は注目すべきであろう。親が自分の長い間在職している幕府の重職の間に得た経験と教訓を、後任であるまだ二〇才にみたぬ長子に伝えようとするのであるから、いかに他人に対して対処すべきか、その心構えはいかにあるべきかという事に終始していることは勿論であるが、その四三ヶ条にわたる教訓の基本的態度は驚くほど『十訓抄』の教訓的立場と一致しているものが多い。この危き世に、軽々しく人の上を悪しくいうべからず、他人に接する時には我、人に勝れたりと思ふべからず、召使うものに咎ありとも勘当してはならず、身分低きものに特に心をかけよ。特に世の聞えがいかであるうかと常に心にかけ、万人と昵び、他人からよく思われねばならぬとくりかえし説く態度は、『十訓抄』の序、あるいは各篇のはじめに記された「ある人曰く」として記された教訓のことばそのままのとき口吻である。『十訓抄』に見られるそれらは重時のことばとしても何等の矛盾が見出されない。

あるいはこれは時代の思潮であり、同時代成立の故の偶然の一致と考えるものもあるかも知れないが、もしかりに同時代の普遍的な思想であったとしたなら、特別に家訓としてとりあげない筈であり、またこの『家訓』と『十訓抄』以外にも同時代成立の諸書にこの態度が見出される筈であるが、他には絶無ではなからうか。『家訓』は京都という特殊な環境風土の中で、東国武士社会出身の重時が遭遇したさまざまな複雑な経験を結集した結果の教訓である。『十訓抄』の態度がこれと同質であるということは、この重時の言動に日常親昵し、その行動を尊敬し共鳴したものが作者として考えられるであろう。特に『家訓』の存在は、それにならって自分の一族の若きものの為に判り易い教訓書を執筆しようとする意図をいだく事となり、例話を周辺の書や、自分の家の父祖からかつて聞いていた談話に求めたのではなかったろうか。北條重時やその教訓を受けた長時の近い周辺に『十訓抄』

の作者は存在した。その人こそ「六波羅二郎左衛門入道」と後によばれた人、すなわち湯浅宗業ではなかったろうか。

この問題の追求は後に説く事として、この二つの文献の処世的態度の一致の部分のいくつかを次に掲げて見たい。『家訓』に付した番号は寛克彦氏の翻刻に付したものの。また『十訓抄』よりの引文の末尾に付したページ数は、岩波文庫本である。また『家訓』の難解語の注釈は寛氏によった。

#### (十訓抄)

(一) 或人云。君となれるもの拙きものなりとも嫌ふ可からず。——  
かた／＼大人は賤をきらふべからずと見えたり。凡いとおしければとて、謬て賞をもすぎさず、悪ければとて、みだりがはしく、刑を加へずして、あまねくひととして恵を施すべしとなり。また一度の過ありとも重き罪を行ふ事よくおもひはからふべし。——たゞふかくならぬもののがをゆるし、のうなき輩をも、あはれみはぐくむべしとなり。(第一小序、二三頁)

#### (六波羅殿御家訓)

- (1) 仏・神・主・親ニ恐ヲナシ因果ノ理ヲ知り後代ノ事ヲカミ、凡テ人ヲハグクミ、要ニ立ヌ者ヲコラサズ、惣テ、心広ク人ニ称美セラレ、——事ニ触レテナツカシクシテ、万人ニ昵ビ、能ク思ハレ、皆人ゴトニ漏サズ語ヲカケ、貧ゲナル者ニ哀ヲナシ、妻子眷属ニイタルマデ、常ニウチ咲イテ、怒レルスガタミユベカラズ。
- (4) 時トシテ何ニ腹立事アリトモ人ヲ殺害スベカラズ。余ニ腹立テ奇怪ニヲボヘバ、人ニアジケテ、能々心ヲ静メテ後、所当ノ罪科ニ行ベシ。忽ニ事ヲ計ルベカラズ。腹ノタツヲシヅメヌサキニ、楚忽ニ計レバ、後悔スル事出クル也。ヤスカラズ思事アラバ目ヲフサギテ能々安ズベシ。
- (7) 何事ニツケテモ、我身ヲイミジキ者ト思ベカラズ。ヨソニハ如

し。あるひ自由のかたにてをだや  
かならず。これは我涯分をはから  
ず、さしもなき身をたかくおもひ  
あげ、あるじをかるしめ、かたへ  
の人をもさぐるなり。あるは偏執  
にてかたくな也。これは我おもひ  
たることをのみおもひて、人の云  
事を用ざる也。——もしはうちと  
けあそぶ所にまじはりて、我はい  
まだみだれぬまゝに、ことうるは  
しくひもさしかためて、人をしら  
かし、其座の興をさますなり。或は  
才能につけたるそしりあり。これ  
は物を知り、才のあつきによりて  
よろづの人をあなづるなり。——  
或はふるまひに付たる僻事あり。

これらは立居の有さまの目だゝし  
く、おこがましきなり。おほかた  
かやうのことは、けうまんをもと  
ゝして、心のすくなきよりおこれ  
り。是によりて、終に生涯をうし  
なひ、後悔をふかうす。かゝれば、  
たとひ身をよしとあんじ、むかし  
をいみじとしのび、ものを面白と  
おもふとも、人目をはゞかり世の  
そしりをつゝしみて、心にまかす  
まじきなり。——

(第二、橋慢を離る可き事小序。七九  
頁)

何沙汰シ、人ハナニトカ見ラント  
思ベシ。構ヘテ我身ヲバヒケシム  
ベシ。

「ヒケシム」——ヘリ下つたようにす  
る。

③4 極信ナレバトテ、我モ人モ乱  
レ遊バム時、カタク実法ナルモワ  
ロシ。若人ニ会合シテ、心ヲチテ  
遊バムニ、オモク振舞ヘバ、還テ、  
人ノ様々シク思テ、是躰ノ沙汰ヲ  
不受スルヨト心エテ、ホイナク思  
也。サヤウノトキハ、殊ニミザマ  
カロク、人ヨリ興アル様ニフルマ  
ウベキナリ。タバイカニモ人ニ随  
ヒ、時ニヨリテ振舞(フ)ベキ也。

「極信」——まじめなこと。「心ヲ  
チテ」——安心して。「様々シク」——  
様子ありげ。分別くさく気取つてい  
ること。

①4 ——シカルベキ人ナンドヨリ  
アヒテ、隔心ナク乱レ遊バン砌ニ  
テハ、余ニ堅ク辞退スルモ帰テニ  
クビレテアレバ、折節ニヨリテ機  
謙ニ随フベキ也

「ニクビレル」——他人に、にくにく  
しい感を起さす。「機謙」——人の氣  
を損じないようにする。

③③ モノヲ着セムニモ、普通ノ人  
ノナベテキルヤウナルモノヲキル

(㊦) 或人はいく、人は慮なくいふ  
まじきことを口とくいひ出し、人  
の短をそしり、したることを難じ、  
かくすことをあらはし、はぢがま  
しきことをたゞす。これらはすべ  
てあるまじきわざなり。

(第四、小序。一〇二頁)

④ 廉直と云は、云出事を、さな  
きよしあらそひ、しらざることを、  
しれるがほにもてなさず、ちぎれ  
ることをあらためず、物をうらや  
まず、悦をもなげきをもともにふ  
かうせず、——事によりて人に  
したがひて、うら面なく、したし  
きをもひかず、うときをもへだて  
ず、ひとしきおもひをなす。これ  
を賢人と云、又廉士といふ。

(第六、二九話。一七六頁)

(㊦) 晴にては、あやまちをせじと  
つゝし、座席の立居に失錯なか  
るべし。身には火の走りかゝり、  
人のものをこぼしかけたりとも、  
人前にてはさわげる景色なく、静  
なるべし。ゑも高く笑わず、物も  
荒くいわず、哀、穩便なるものか  
なと見ゆべきなり。

ベシ。常ニモナキモノヲキレバ、  
目ヲ立テ、人ノナニトヤラム思モ  
ノハワロシト思ベシ。

(㊦) 百人ノ親昵ノ殿原アリトモ、  
其中ニ一人イト心ノ程知ラザラン  
人交リタラバ、穴賢、人ノウヘヲ  
悪シク云ベカラズ。大方人ノ上ヲ  
云事アルベカラズ。我ガ若党ノイ  
ハンヲモ禁制スベシ

(6) 何ニ不便ニ思者ナリトモ、ウ  
ヘニ勝劣ヲミスベカラズ。平等ニ  
コトヲカケアタルベシ。タトヒ其  
身カラエセ者ナリトモ、満遍ニ人  
ヲ漏サズト聞ケバ、聞及者感ジ思  
也。爾リト云ドモ、人シナニヨテ、  
差別ヲウシナウベカズ。  
ウヘニ——うわべに。コト——言葉  
満遍ニ——平等に。

(3) ——前略——親疎人ノ目ニタ  
ハヌ躰ニ、何モソラサズ、振舞ベ  
シ。

②③ 静タル座席ニテ、居カタマリ  
タル所ヘノゾミタランニハ、イタ  
ク高ク居ベカラズ。サレバトテ下  
ニモ居ベカズ。能程ニハカラフベ  
シ。

(以下②④⑤に会合の場合の着席の  
方法、食事の手法などが細かに述べ  
られてゐる)



以上対比した部分はこの二つの文獻が同一の思想的立場に立つものであることが顯著に示された部分を若干抽出して見たのであるが、このようなところは他にも多く見出される。私の指摘したい事は共に己を抑制し、周囲の人たちがいかに自分を見ているかという事を絶えず念頭におき、相手を満足せしめ、世評の動向を意識の底に置くべき事を主張する態度である。『家訓』の(16)に

朝夕ノ家中ニモ、我ガフルマイヲ試ミテ、世間ニ如何サタンスラント思ヒ、召仕フ若タウニモ心中ヲミヘジト、此ノ二ノ構ヘ心ニ懸テ、人ノ吉ト世間ニ云ハル、此様ヲ能々□振舞ニヨテ人ニ勝ルナリ。何ニタノシクアリトモ、心中ニ是ヲ挿ミテ(以下)

というごとき、若党と言えども最も信頼すべき家中の者でありながら、それにさえ自己の本心を明らかにせず、世間の沙汰をよく考えていかに楽しい時でも油断するな。この事を心掛けよ。それが人に勝れたものになる事だという教訓は従来の東国の武士の道徳とは全く異質なものとわねばなるまい。『十訓抄』には「人目をばばかり、世のそしりをつゝしみて心にまかすまじきなり」(八〇)と言ひ、「世の人のいみじき孝子なりといひて世のおぼえいできにけり」(六六)と世評を意識する語句が頻出する。第六の三四話に小野宮右大臣実資が賢人のほまれを取らんとして、火鉢の火が御簾のへりにとび、そのまま燃え上つて新築の家が焼失したのを消させず笛一つをもって他を持出させず、人の間に答えて僅かなる走り火による災は天の与うる災であると答えて賢人の誉を得た話があるが、『家訓』の(3)は「イカニ得利アル事ナリトモ、世間ノ聞悪シカリヌベカラム事ラバ、百千ノ利潤ヲ捨テ、人ギ、吉カラム事ニ付クベシ」という。この立場と共通する意識からはこの小野右大臣の奇矯なる言動も採録するに足る説話となるのであらう。この世評を第一と考えて利益を捨てよと強調するのは何故か。

「大かたは心操もおさまり、才幹もありて、よき人なりといひそめられぬれば、少々失あれども世にも人にもかならずおもひゆるさる。大節身にあるときは小過ありといへども凶とせずといへるがこ

とし」(第一・第一〇  
話・三七頁)

「大方世に有道のわずらはしくふるまひにくきこと、うすき氷をふむよりもあやうく、はげしきながれに竿をさすよりも甚しきものなり」(第二・第二  
話・八二頁)

であり北條重時の晩年の筆『極楽寺殿消息』には

「舟はかぢといふ物をもつて、おそろしき浪をもしのぎ、あらし風をもふせぎ、大海をもわたる也。人間界の人は、正直の心をもちて、あぶなき世をも神仏のたすけわたし給ふ也」(98)

という、あやうきこの世をしのいで行く一つの心得と見られたのである。

この世の中を危しと見る認識は六波羅の探題という重職にあり、かつ幕府の中樞に地位を占めた北條重時にとつても、また私の『十訓抄』の筆者と推測する湯浅宗業にとつても痛切なるものであったことを次に考えて見たいと思う。

注(一) 桃裕行氏説は未見、寛克彦氏著『中世武家々訓の研究』所引による。石井利雄氏説は「北條重時家訓試考」(日本歴史・昭五〇・三月)による。

### 三、『十訓抄』と『極楽寺殿消息』

北條重時が一八年の久しきにわたつて六波羅探題の職にあつたことは前述したが、彼の経験は平坦温和なものではなかった。頼朝没後の相ついでおこる権力闘争のなかに北條氏が決定的優位に立つに至つた道程の中にも、絶え間ない同族の覇権をめぐる争いと、これに呼応する京都側の策動の複雑な歩みの中にそれらを取りこえて生きて来たのであつた。重時の十五才より以降の主なる幕府内部の動揺を列挙すると次の如くであらう。

建暦三年(一二三三)五月(一六才)和田氏の叛乱。

建保二年(一二三三)十一月(一七才)京都における頼家遺児を擁する和田残党の蠢動。



建保七年（一二二五）一月（一二才）実朝暗殺さる。義時免る、同年二月阿野時元駿河に叛す。

承久三年（一二三二）五月（二四才）承久の乱。

元仁元年（一二三四）（二七才）義時急死。後妻伊賀氏の隠謀発覚。

嘉禄二年（一二三三）四月（二九才）陸奥にて禅師公曉と称して結城、浅利叛す。

安貞元年（一二三七）六月（三一才）泰時次男（重時の兄）郎従のため殺害さる。

寛元四年（一二四六）六月（四九才）泰時の弟朝時の子、江馬光時の逆心発覚配流さる。評定衆四名罷免さる。

宝治元年（一二四七）六月（五〇才）三浦氏の乱。宝治合戦という。重時京に在ってその余党を肅正す。

以上が重時が長男の長時に六波羅探題をゆずり帰東するまでの幕府に対する主なる叛乱であるが、これらにはすべて北條氏の一族、あるいは縁戚関係の豪族が参加しており、一步誤れば幕府の根底はくつがえる危機の連続であった。この間に在って三三才よりの一八年間、重時は六波羅探題にあってよく朝廷や公家との折衝、京の警備と治安の維持、西国御家人の統制に手腕をふるった。特に御嵯峨天皇の擁立に活躍して以後、朝廷は諸事関東方の指示をまつという慣例を開いたが、この間の配慮苦心は容易ならざるものがあつた。この経験がすなわち懇切なる『家訓』となり長時に伝えられたのであるが、帰東以後若干の執権時頼の補佐として連署の職にあること九年。康元元年（一二五三）時頼は病によって執権職を辞したが、これに先立ち重時も連署を辞し出家した。時頼のあと執権となつたのは、京より帰東した長時であり、平穩のうちに執権職が行われた。今までは執権職をめぐる一族間の動揺、争乱が必ず有つたのかかわらず、おだやかな授受が行われたのはこれが最初であつたことは前述したが注目すべきことである。その後重時は一族の長老として尊敬せられ、弘長元年（一二六二）六月に極楽寺別荘において発病、十一月六四才をもって没した。『極楽寺殿

消息』は出家後、没年に至るまでの六年間の執筆と推測せられているが、これはこの重時の長い間の体験にもとづく教訓を子や孫などに伝えるために記したものであるが、『家訓』と同趣旨のものであり一致する部分が多いが、なお敷衍し多方面にわたり懇切に説いていて、『十訓抄』とまた一致する内容が多い。『極楽寺殿消息』の執筆年時は不明であるが、重時出家直後とすれば『十訓抄』成立以後五年、没年に近いとすれば十年の後と考えられ、この内容の一致は直接の影響とは考えられない。この『消息』に見られる教訓はもちろん執筆時の重時の心境を示すものであるが、ここに示された処世訓は一朝一夕に出来上つたものではなく、長い間の経験の集積であることを考えれば、おそらくは壮年の日から重要な政務にたずさわリ、朝廷公家側と鎌倉殿御家人や一族間の有力者たちの間に立って、ここに記されたごとき慎重な配慮によって事を処理して来た日常の言動の集大成としなければならぬ。ここに示された言葉や思想はすでに六波羅探題在任中にも周囲に対する教訓として語られたものであると推察すべきであろう。すなわち『消息』と『十訓抄』内容の一致はこの間の事情を語るものと考えねばならぬであらう。両者の一致をしばらく眺めて見たい。

『十訓抄』の「第四、人の上の多言等を誡む可き事」の小序に他人の事をいうべからずと説いており、前掲のように『家訓』(5)でも他人の悪をいっていけぬと説いているが、(消息二三)にはさらに善も悪もいふべからずと述べている。

「人のうしろ事、返々の給ふべからず。よき事をも、このみて人の事をばの給ふべからず。よき悪きはしらね共、まづうしろのさたありと聞ては、心もとなくおもふ事也。よき事を申すときとては、よろこばるれども、さなしとて何のくるしみかあらん」

さらに消息(89)(90)にも

「たはぶれなればとて、人のなんをいふべからず。我はたはぶれとおもへども、人ははづかしきによりて、あやまちあるべし。たはぶれにも、人のうれしむ事をの給ふべし。よろづにはどかり、なさけふかまるべし。」

「いかなるしづめのなりとも、女のなんをいふべからず。いわんやはぢあら



ん人の事は中／＼いふにをよばず。よき事をば申もさたすべし。あしきをか  
くし給ふべし。是をおもひわかぬ人は、わが身にはちがましきこと有べし。  
すこしもかうみようならず。」

さたすべし——沙汰すべしであつて、ここでは禁制せよの意

とあるが、この「人のよき事であつてもほむるべからず」とする態  
度は『十訓抄』(第五)がよく示している。『十訓抄』では

「又我その能有とおもふ共、人にゆるされ、世に所をかるゝ程のみならずし  
て、人のしわざをほめんとせん事も、いささか用意すべき物なり。」

と述べたあとに参河守知房が伊家の歌に感歎して「優によみたまへ  
り」と言つたのを、伊家が腹を立てた話を『袋草子』から引いている  
が、作者はさらにこの話に付記して

「優の詞も事によりて斟酌すべきにや。是はまさるがほめけるをだに、か  
らくとがめけり。況、をとられん身にて褒美、中／＼かたはらいたかるべ  
し。人の善をいふべからず。況その惡をや。」(七六頁)

と述べてその態度が全く一致している。また『十訓抄』(第五)に  
そも／＼いもせのならひは、偕老同穴の契とて、たどうちあるともにはな  
ずらへがたければ、妻をもとめんには、上臈は品をえらぶべし。つぎさま  
には、みめしなをさきとすべからず。こゝろをえらぶべきなり。」(三三頁)  
と説き、おなじく、第一四話では

「しかれば女男の中はたがいにははらかに、へだつるおもひなくして、あ  
しきことはともいさめ、よきことは互にすゝめて、此世には家をおさむ  
るとくをみだらず。のちの世はみちすゝむる善智識となるべし。」(三七頁)

さらに女性の心得をとき、女もよく男をえらぶべきことが肝要であ  
ると、男女間の多くの説話を引いている。同様のことが『消息』の(49  
(50)にも夫婦に関する心がけとしてのべられている煩を僻けて一部を  
引用する。

「人の妻をば心をよく／＼見て、一人をさだむべし。かりそめにも、其外  
に妻にさだめて、かたらふ事なかれ。」(消息50)

「女の心をもつべき事、むかしより今にいたるまで、女はやさしく、事の  
のびやかなるをほんとしり。よく／＼心得給ふべし。物をねたむ事、是を

返々心せばきとす。一河のながれをくみ、袖のふりあはせだにも多生のち  
ぎり也。一夜のかたらひなりとも、先世のちぎりふかゝるべし。——仏神  
もあはれみをたれ、今生後生めでたきなり。」(消息49)

教訓のことは一致しないが、『十訓抄』所引の説話はよく『消息』  
の内容にふさわしいものが見出される。

『十訓抄』巻六の小序に、「或人云」として孔子の語を引いたあとに、

「しかれば、主君にもあれ父母にもあれ、あしからむ事をば必諫むべし。

此事よの末にかなひがたし。人のならひにて、おもひたちぬることいさむ  
るは、心づきなく、いひはやす人は、こゝろにかなふ。天道はあはれとお  
ぼすとも、主人はあしくおもひなむものは、かへりみをかぶることあるべ  
からず。さて、することのあしざまに成ときは、其人の能いひける物をと  
おもひ合すれども、又こゝろのひくかたにつけて思立事有時はむづかし。

又いさめむずらむとて、此ことをきかせじとおもふなり。是はいみじくを  
ろかなることなれども、みな人のならひなればちからなし。さればはらぐ  
ろからず心づきなからぬほどに、はからふべきなり。すべて人の腹立した  
る時、こはく制すれば、さかりなる火にすくなき水をかけむがごとし。何  
の益があるべき。しかれば機嫌をはかりしりて、やはらかに諫べし。君も  
しをろかなりとも、賢臣あひたすけば、その国みだるべからず。親もしお  
ごれるとも、孝子つゝしみたがはど、其家またかるべし。をもきものな  
れども、船にのすればしづまざるがごとし。上下はかはるとも、ほど／＼  
につけて、頼みたらん人のためには、ゆめ／＼うしろめたく、はらぐろき  
こゝろあるまじきなり。かくれては又冥加をおもふべき故なり。」(四三頁)  
と、主や親を練むることのむづかしさと、その方法、心がまえを説  
いているが、『消息』には、

「一、主人の仰なりとも、よその人のそしりを得、人の大事になりぬべか  
らん事を、いかにもよく／＼申べし。それによりて、かんだうをかふら  
ん。くるしかるまじきなり。よく／＼あんぜさせ給候はど、道理にきゝて、  
いよく／＼かんしんあるべし。又神仏もめぐみ給ふべし。」(95)

一、いかに人ため、世のためよからんとおもひ給ふべし。行すへのため  
と申也。しろき鳥の子はその色しろし。くろきはその子もくろし。たでと  
いふ草からくして、そのすへをつぐ也。あまき物のたねはおとろふれども



そのあぢあまし。されば人のためよからんと思はゞ、すへの世かならずよかるべし。我が身を思ふばかりにあらす。(96)

と全く同じ趣旨の事がのべられている。また『消息』(43)は「道理の中の僻事、僻事の中の道理」を懇切に説いているが、これを実際の事として証するためには『十訓抄』第六の第一九話の白河院の御仁慈の話、あるいは第九の第二話、顯季の逸話などがまことにふさわしい例話となると思う。また『十訓抄』第六・第三一話に

「憂喜ともに深うぜざる例の一つの証あり」と言つて塞翁の話を引き、『消息』(43)も同じく塞翁の名をあげて、何事もよき事もあれば悪しき事もあることを教えている。

以上は両者の説くところの一致例の多いなかの一部を対照したのであるが共に同一の教訓的立場に立つものであることは明らかであろう。

以上あぶなき世の中にありながら、多くの信頼をあつめ進退を誤ることなく誠実に幕府を安泰ならしめた北條重時の処世の態度と心構えは、その身近かにその言動を見聞した六波羅に仕えた西国御家人にも強い影響を与えたことは当然であろう。以上縷述のように、北條重時の二つの家訓と『十訓抄』の精神的地盤が同一であることが明らかとなったいま、さらに『十訓抄』の撰者と私が推測する湯浅宗業をめぐる周辺にはいかなる事があつたであろうか。

#### 四、湯浅宗業の経験

湯浅氏の興隆が世の政権のはげしくゆれ動く中にも誤らず、その基盤を維持し一族繁栄して来たことについてはすでに述べたところだが、それは祖父宗重、父宗光のころであつた。では宗業にも「危き世」と見るべき事があつたのであろうか。ここに壮年の彼自らの体験した危機があつたことをまづ指摘して見たいと思う。

『高野山文書』その他によれば紀伊国阿世川荘の下司職は建久八年(九七)九月源頼朝の下文によって文覚が任ぜられたが、同年十月文覚は

これを湯浅宗光(宗業の父)に譲補した。これに対して本所と推測される中納言藤原隆房は正治元年(九七)、当庄惣地頭職は文覚聖人である。聖人が勅勘を受けた後は宗光の代官は停止さるべきであるとしたが、「宗光は御家人であり、功あるによつて新恩に準じて給せらるべきを頻りに愁申すによつて」(四・二・一〇)將軍家(実朝)により地頭職の補任を受けている。しかるに承久元年(二二)にいかなる罪科によつたのか、今明らかとしがたいが宗光は熊野神人の訴によつて対馬に配流されたが、子息の宗業が父の所領を安堵された。承久の変の後、宗光は免され、旧領は再びその手にもどつた。この一地域の事件にもその背景には当時の院側と幕府の二勢力の衝突が在地の諸権益と結びついて複雑な動きを示したのである。この間の推移と背後の事情を上横手雅敬氏の「鎌倉幕府法の限界」は次の如く述べている。やや長文とはなるが、直接湯浅氏に触れた部分を抄出して見たい。

「かつて紀南の海岸地帯の要衝湯浅庄に、一族相拠つて名田を分有していた湯浅氏の一支族が有田川の上流阿豆川庄に姿をあらわすのは鎌倉初頭である。長保三年(一〇〇一)平惟中よりこの地を寄進された寂楽寺は、長寛より元暦にわたる高野山の領有運動のために、ほとんど危地に追い込まれたが、にもかかわらず結局その領有を全うすることが出来た。——文治元年(一一八五)湯浅一族は、平氏の敗將忠房を擁して、熊野別当湛増等の源氏の余党と戦つていた。文覚の仲介によつて忠房を引渡して源氏に降り、御家人として本領を安堵されたのは翌年である。一方寂楽寺と高野山の紛争が前者に有利に転回したのも同じ頃である。この原因を寂楽寺側本所たる鳥羽宮の幕府への懇懇に求める論者(江頭恒治『高野山領荘園の研究』)もあるが、もし、しかりとすればその間、幕府への仲介の勞をとつたのは文覚であろう。またこれと並行して、寂楽寺の爪牙として高野山側下司と戦い、これを追放し、在地の勢力関係を寂楽寺側に有利に推進したのは湯浅氏であつた。しかしながらその当然の結果として、寂楽寺はその領有を認められると共に、関東口入の下司(地頭)文覚を承認しなければならなかつた。庄園領主にとって、関東口入の庄官の存在の好ましくないことはいうまでもないが、文覚に代つてこの地方の土豪たる湯浅宗光が下



司（地頭）となるに至っては尚更であろう。しかしこの間、京都の政界は漸く慌しい動きを見せ始めた。頼朝の死後、謀臣源通親が廟堂に猛威を振い、親幕の公卿相次いで解官処罪を蒙った。東西政界を奔走して敏腕を振い、隠然重きをなした文覚も佐渡に流罪の身とはなった。文覚の勸諭を理由に、また文覚と宗光との交代が私的譲渡によるものであるとして、藤原隆房が地頭停廢を企てたのはまさにこの時であった。」

さらに上横手氏は当時の幕府の状態を説明し、御家人の整備充実を目標とし、頼朝の死後の北條氏の執権政治もこの線に沿って行われたが、承元四年の湯浅氏の地頭補任もその一つであろう。しかし幕府側はなおその内部の修理固成に忙殺せられ、京都に対する態度も軟弱な外観を呈し、正治・承元の間には地頭としても承認されなかった時期と見るべきであろうが、さてこの地頭補任も束の間、承久元年（二）の宗光配流事件は新局面を展開し、承久の乱に連なるものであろう。熊野の勢力は院と結びつき、御家人に既得権として承認された庄園諸職を寺社本所側に奪回しようとし、幕府もその限界の許す限り、御家人のため努力した。その現われが子息宗業への所領の安堵であり、承久の変後宗光への還補となったのであろうと仔細にこの間の諸勢力の推移を分析している。一所懸命のことばのあるごとく、自己の基盤を守る為の諸勢力との争闘、妥協は宗業の晩年にもくりかえされるのであつて、高野山・寂楽寺などとの間にある時は協力し、ある時は離反する事情を語る文書が残されているが、これら西国御家人であった湯浅氏の置かれた地位、および若き日の宗業の身近に起った事件をかえり見るならば「この世は危くつるぎの刃を渡るごときもの」と感じて、その世をいかにして生くべきかの教訓の筆をとる心境となるのも当然ではなからうか。特に三代にわたって庇護を受けた鎌倉方を代表する六波羅に仕え、尊敬していた北條重時ならびにその子長時、などに親昵し、親しくその言動を知悉した湯浅宗業にとって『家訓』の存在は耳にした筈であり、これが執筆の要因となつたのではないかと私は推測したい。

（注）歴史学研究一七七号、いま『論集日本歴史4 鎌倉政権』所収による。

## 五、湯浅宗業の文学的周辺

湯浅宗業を『十訓抄』の作者として私が提説した時、それに対しての疑問は一地方武士にすぎない彼が果してこれだけの詩歌文芸全般に関する教養を持ち得たであろうかという点にあった。すなわち『十訓抄』（第一巻）に中納言親経卿が後鳥羽院詩歌合に佳句を作つて山送の弁といわれた逸話をあげ、菅原為長が列席採録したであろうと推測し、反対に宮廷のサロンのな雰囲気の中で醸成されたと思われる右のような説話が、どのような経路をたどるにしろ、六波羅庁に仕えたという一武人の耳に伝わる可能性は少ないと見なければならぬ（一）<sup>(1)</sup>。と言ひ、また

『十訓抄』には『今物語』より五話採録されている点を考えると、菅原為長は定家を通して『今物語』を見る機会を得たと想像され、また、妙覚寺本奥書に記されているという六波羅二藏衛門入道が、定家、信実と親交があつたかどうかは明確でない（二）<sup>(2)</sup>。

という説もある。これは歌壇に関する逸話や物語などは、列席者でもなくまた直接交友のなかつた武士階級は知る筈がないという前提に立つての立論である。これは中世の文化を闇黒の時代と見て、武士階級は上下共に文事に疎遠であつたとする古来の僻見にとらわれたものであつて、そのしからざることはすでに先学によつても明らかとされているところであるが、いま湯浅宗業の周辺に限って、果して文事に無縁のもののみであつたかを考えて見たい。

宗業の親縁のもの、すなわち湯浅氏には和歌史上注目すべき人物のいることを述べて、和歌、さらに広くは文学一般に彼が関心や智識をもつたのもその影響であり、また文学愛好は湯浅氏の上に流れる遺伝的素質ではなかつたろうかということに触れたい。和歌史上の二人とは誰か。すなわち伯父にあたる上覚と従兄にあたる明恵の二人である。

上覚は『愚管抄』に平清盛が熊野参詣の途上、平治の乱勃発するや



急報に接して帰京せんとする時、武具の用意を欠いていた時のことを述べたなかに「宗重ノ子ノ十三ナルガ紫草ノ小腹巻ノ有ケルヲ宗盛ニハキセタリケル。ソノ子ハ文覚ガ一具ノ上覚ト云、ヒジリニヤ。」とあるのがそれで、「湯浅氏系図」(伊藤氏人編<sup>1</sup>、<sup>2</sup>州史館<sup>3</sup>所載)によれば宗重の四男に「行慈上人浄覚」とある。源頼朝の義経あて元暦元年(八四)二月四日の書状に「湯浅の入道と申候者は文覚房につきてもとより志候者にて候也。——道勝御房などたづねまいらせておはしまさば、かやうにおほせられ候とひろう申給べく候——」(文書<sup>4</sup>)とあり、上覚自らも「当寺(神寺<sup>5</sup>)には故上人御房(文書<sup>6</sup>)始めて御居住候しには道勝房行慈こそ随逐しまいらせて候」(文書<sup>7</sup>)と述べているごとく仁安三年(六一)以前から文覚の弟子となり、承安三年(七三)の文覚の伊豆配流にも随従していて早くから頼朝とも親しかったので、湯浅氏が平家より源氏への転換もこの道勝房行慈、すなわち上覚の一族に対する説得力があったのである。彼の生涯と神護寺との関係、また湯浅氏を基盤として活躍したことについてはすでに仲村研氏のすぐれた研究がある。ここでは上覚の文学的な面に触れたい。中世私撰歌集の一つに『玄玉和歌集』がある。全十二巻千余首の近き世の歌を集めたという序があるが八巻以下は散佚して伝わらない。成立はおおよそ建久二年(九一)説(安井久善『中世』)とされている。近時その撰者が『和歌色葉』とともに上覚であることが推定せられた。俊成の五五首が最多であるが、良経(四二)西行(四〇)定家(三三)寂蓮(三一)俊恵(三〇)家隆(二三)公衡(二二)隆信(二一)以上が現存七三一首のうち二〇首以上採られている作者だが、上覚と共に文覚の弟子であった性我が九首とられている。撰歌の面から見ても御子左家の新風への共鳴が見られる。『和歌色葉』の序に、ある殿原、女房七・八人が会の歌や私歌集を寄せて取捨してほしいと言ってきたので、ともあれ書きつけたということが記されているが、この集をさすものと見て誤あるまい。また『和歌色葉』は建久九年(九八)五月上旬に成り、十一月ごろ顯昭に示し、十二月上旬に後鳥羽

の叡覧に供した。この書は批評的考証的ではないが集成組織の才はみとめられており、(『和歌文学』<sup>8</sup>)中世歌学の注目すべき著述である。明恵が、弟子の喜海に語った言葉の中で、私は先師(上覚)の命によって十八才まで詩賦の稽古をして風月を詠じたが、その興は深くて他事を忘れるほどであったという。(『明恵上人傳』<sup>9</sup>西行は晩年、しばしば高尾寺<sup>10</sup>を訪れたようであるが上覚との交流があったことが推測される。

湯浅氏親縁の第二の歌人はすなわちこの明恵である。明恵は幼時父の戦没に逢い、母方の伯父である上覚に師事しその薫育を受けた。明恵の清冽な言行や歌業については、近時特に多くの著書、論考が多く、いま縷説しないが、十八才の時以降、つとめて歌作から遠ざかろうとしたが、なお雪月などの美しさに惹かれて詠じようとする思が湧いて来たが、一首としてまとまる様なことは稀であったと自ら語っているが、その稀な作歌も幸に、弟子高信によって編集され、今日もその格調高い風韻に触れることが出来る。湯浅宗業はこの二五才年長の従兄に生涯深い尊敬景慕のおもいを抱いていた。明恵没後約四〇年を経て、文永七年(七〇)星尾寺に田地を寄進している。時に宗業七六才でこれが現存最後の自筆である。この星尾寺とはかつて父の宗光、引き続いて宗業の居宅であり、明恵上人が渡天の志を實行しようとした時、宗業の母の口をかりて春日大明神が託宣を降して止められた故地である。

すなわち宗業の伯父上覚、および従兄明恵の存在を考える時、この湯浅一族に文事、特に和歌愛好の風が強く存在したことが推察されよう。しかし『十訓抄』成立の建長四年(一一三二)は上覚歿後二六年、明恵も二〇年の過去において病没している。ここでさらにこの書を編述当時の彼が仕えたという六波羅が果して和歌の世界に無縁であったかどうかを考えて見たい。

私は前述のごとく、六波羅探題の職にあった北條重時その子長時・時茂に湯浅宗業は仕え、その思想的影響を受けたと考えられる点を述べたがさらに文学に関する影響もあったのではないかと推測する。す



なわちこれらの三人はすべて勅撰歌集に撰歌された歌人であった点である。

重時が十八年にわたり在京し責任ある地位に在ったが、当時公武の融和は表面的なものであって、朝廷側の権勢伸張をねらう謀略の中にあって、幕府側の意向を貫徹したのは、単に武威をもつてのみではなかった。重時の同腹の姉は当時の京都側の有力者であった土御門定通（源通親の子、勅撰集に五首）の妻となったが、これらの側面からの援助のほかに、重時が公家方の洗練された社交術をはじめ伝統的な高度の教養をよく身につけて折衝対応して成果をあげたのであって、この際、和歌はもつとも必要な教養であった。寛泰彦氏は重時と藤原定家が親交がありその教を受けたとのべている。<sup>(6)</sup>これは定家が信濃国司となった時（安貞元年？）守護が重時であった（寛元四年）関係からであったという。重時以下三代の勅撰集に入集した歌は次の如く数えられる。

重時。新勅撰(一) 続後撰(三) 続古今(二) 続拾遺(二) 玉葉(一) 続千載

(一) 続後拾遺(一) 風雅(一) 新千載(一) 新後拾遺(一) 計一六首

長時。続後撰(二) 続古今(五) 続拾遺(二) 新後撰(一) 玉葉(二)（新後撰・玉葉一首重複）

計一一首

時茂。続古今(二) 続拾遺(一) 新後撰(一) 計四首

鎌倉においても頼朝・実朝を中心の和歌への親近はすでに知られているが、北條氏一族の中では泰時を境に、政村・実泰・実時などの詠歌が勅撰集などに入り、関東にも好学の風が興ってくるのであるが、京の政治的中心である六波羅探題であった重時父子三代にわたって和歌を嗜んでいたことは、そこに仕えた湯浅宗業の文学的素養を考える時、見逃がすことの出来ないものであろう。単に和歌のみならず当時の武士の喜んで歌った早歌（金典）の中に見られる和漢の故事の豊富さはまた当時の武士の教養の範囲を語るもので、宴曲研究の第一人者である乾克己氏も当然このことは知悉しておられる筈だが、何故に湯浅氏の教養を低く見ているのであろうか。

なお宗業は晩年の文永六年（一二二九）京の屋敷地について返還の訴訟を起

している。この屋敷地とは押小路堀河にあって寛元三年（一一五五）母の住心尼からの譲状のあることが述べられている。桜井宮の御壇所として借したのであって、宮がなくなつた後は返却されたいと言っている。

桜井宮とは後鳥羽帝の御子、寛仁法親王で文永三年（一一六三）五九才でなくなられているが、寂楽寺が破壊顛倒した時、住心尼が独力をもって修造にあたり大功あり、湯浅氏の子々孫々に紀伊阿氏川莊預所職の相伝を許される旨の下文を与えるなど密接な関係があった。当時西国御家人の重要な勤務は京都大番役、及び籌屋番役であったが湯浅氏も「八条殿政所跡半分に屋をも造て被守護候はんする事」（北條泰時の湯浅氏兵衛宛書状）とある様（二三五）番役用の家屋はあったが、それとは別に屋敷地をもち、嘉禎年中（二三八）には焼失（源重盛上と記す）したこともあった。すなわち短期間の勤仕ではなく、早くから京に住居をもち、ある時は在京し、ある時は在国するという状態であった。『十訓抄』の序に「をのづからいとまあき、こゝろしづかなる折ふしにあたりつゝ、草のいほりを東山のふもとにしめて」執筆したことを記しているが、この押小路堀河の地でのことではなかったろうか。

注(1) 乾克己「十訓抄と菅原為長補説」(国学院雑誌、昭四四・四)。

(2) 志村有弘「十訓抄の説話配列と編者」(『中世説話文学研究序説』二三八頁)。

(3) 外村久江「鎌倉武士と中国故事」(東京学芸大学紀要第一八集・昭四一・一一)および「御成敗式目の成立とその前提」(東京学芸大学研究報告第六集)。

(4) 仲村研「神護寺上覚房行慈とその周辺」(文化史学第一七号、昭三八・一一)。

(5) 山田昭全「上覚・千覚と玄玉集の撰者」(国文学踏査七号、昭三八・二二)。

(6) 『中世武家々訓の研究』五頁。『明月記』には八ヶ所に重時の名が見える。嘉禎元、二・一四の条には源具親と同道来訪したが留守で逢わなかった旨が見える。親交があったという論拠は不明だが、面識はあったであらう。あるいは和歌について教を受けたのではなかろうか。



(7)『湯浅町誌』は同町にある勝楽寺とする(同書七一〇頁)が、京都北白河とするのが正しい。今江広道「寂楽寺の所在地について」(日本歴史、二五八号、昭四四・一一)

## 六、結 語

以上論述し来つてようやく結論を出してもよいかと思う。

私は妙覚本奥書にいう六波羅二藤左衛門入道と湯浅氏の宗業すなわち二郎左衛門入道智眼とよばれた人物と同一であろうとするのである。彼が身近く仕えた北條重時、その子長時などから受けた教訓を基として、宗重、宗光、また自己をふくめて湯浅氏の過去、現在の歩みを考えた時、一族の子弟の教訓のために執筆したのが『十訓抄』であったと思う。彼の周辺をめぐる六波羅北條氏の文雅と、彼の一族に流れる文学愛好の素質、壮年時における上覚・明恵というすぐれた文学者からの影響を考えればこの流麗な行文も、内容豊富な説話の引用も当然ではなからうか。各篇の冒頭に引く「或人いわく」とする教訓のことは彼の仕えた重時、あるいは長時の日常の御家人に対する教訓のことばと考へても矛盾はない。

或はこの教養ある武人、宗業の作歌一首も他の私撰集などに見出し得ないことに不審をいだくものがあるかも知れない。しかし『玄玉和歌集』『和歌色葉』を撰したほどの彼の伯父上覚の和歌が現存ただ二首、『今撰和歌集』『明恵上人歌集』に見られるのみである事を知れば、彼の文学的遺作の残らぬこともまた止むを得ないと思う。

『十訓抄』の作者としての菅原為長説の提唱はこの書の出典、解釈の上には大きな功績があったが、序文の否定は全くの空想に立脚したものであり、また為長の境遇は決して『十訓抄』の説く態度とは一致していない。

なお二年おくれで成立したという序をもつ橘成季の『古今著聞集』は一応の成立を見た後に『十訓抄』による補入が行われたといわれている。すなわち橘成季は『十訓抄』を参看したもっとも早い時期の人

で、両者の間が近い関係にあったことが伺われる。ちなみに宗業の母住心尼、すなわち湯浅宗光の妻は橘氏出身であり、「湯浅景基寄進状」(寛喜三年・鑑無畏寺文書)には前刑部丞橘資重、左衛門尉橘資信の名が見える。もちろん橘姓は多いのであつて成季との関係は不明であるが一言付記して置きたい。

(本稿は全般にわたつて寛泰彦氏著『中世武家家訓の研究』に教えられるところ多大であり、仲村研氏編『紀伊国阿氏河莊史料』二冊によつて得た恩恵は大きい。文中所引の諸先学と共に厚く御礼を申上げたい。)